

自閉スペクトラム症の諸症状と「意味世界」形成の問題

— 「強度行動障害」者への実践とその発達論的分析から —

○ 福祉コモンズ、元早稲田大学 麓 正博 (007306)

キーワード：強度行動障害、安心基地、意味世界の形成

1. 研究目的

この研究は強度行動障害支援者養成研修を受講し、その内容に疑問を抱いた3名の有志の議論から始まった。3名は全く違う法人で、各々が強度行動障害のある人への実践経験をもち、研修の中核にある「構造化—適応」とは違う「関係性—発達」というアプローチで多くの成果を上げていた。

その実践方法に共通していたのは、①まず安定した1対1の関係をつくり、時間を掛けて信頼関係の修復と緊張や不安の解消を図ったこと。②そうした二者関係から形成される安心基地を土台として、徐々に周囲とのやりとりを増やし、多様な小集団への参加も促して行ったこと。③同時に、そこでの物・事とサインや言葉を結び付ける働きかけを根気強く続け、「意味世界」の形成に注力したこと。

また成果として共通していたのは、①信頼関係や安心基地の形成が確信できた頃から社会的笑顔が生まれ、「愛着」に似た関係も現われてきていたこと。②指差しや言葉が意味あるサインとして機能し始めた頃からは他害やパニックがなくなっていたこと。③信頼関係ができ「意味世界」が広がると、極度の偏食や感覚過敏も一定程度改善され、こだわりは減り、多様な関係が作れるようになったこと。

以上のことから、私たちは自らの実践成果を公表し、その理論的分析を通して「強度行動障害」のある人たちへの新たな支援方法の可能性を提起したいと考えた。今回の報告では、特に重要だと考えるASDの人たちの諸症状と「意味世界」形成との関連について仮説的に述べてみたいと思う。

2. 研究の視点および方法

私たちの3事業所のうち2つは、どちらも所謂小規模作業所であり、作業も食事も同じテーブルで行なわざるを得ない程狭い空間で実践が行なわれていた。したがって、視覚的構造化や時間的構造化等はある程度行なっていたが、空間的構造化は座席の配置を考慮する程度のことしかできていない。「構造化」が不十分な中でも、それが十分にできていた施設と同じような成果が上がっていたとすれば、そこには「構造化」とは違う何か大切な要素が働いていたことになる。

私たちは、自分たちの実践を協議・分析する中で、次のような視点が大切だと考えた。

『私たちは多動な人たちを問題としつつ、多動でない人たちが何故多動でないのかを問題としてこなかった。環境の変化等でパニックになる人たちを問題としつつ、パニックにならない人たちは何故パニックにならないのかを問題としてこなかった。動き回る彼らは問題で、動き回らない私たちは問題ではないのか？前者が不思議ならば、後者の行動もまた不思議ではないか。ASDや「強度行動障害」の諸症状を理解するには、こうした“対の問い”が重要であろう。この対の問いに統一的な説明ができた時に初めてその発生メカニズムが理解できるのではないか。』

その統一的な視点として浮かび上がってきたのが「意味世界」の形成という問題であった。

3. 倫理的配慮

本研究は、各法人(他の2名は理事長と常務理事)の協賛と承諾を得て、数年前から数十年前の実践を持ちよるところから始まっているので、大学の研究倫理審査は受けていない。その作業に当たっては、研究の趣旨と方法に同意を得られた5事例(本抄録では割愛)を対象とし、個人を特定されないよう十分に配慮した。実践協議は3名で行ない、その理論的分析と執筆は学会員の麓が本学会の研究倫理規定を遵守し行なっている。本報告に関連し、開示すべきCOI関係にある企業等はありません。

4. 研究結果 一人間発達の基本とASD症状の発生メカニズム(仮説)

最初に、人間発達の基本の確認から始めたい。人は誰でも身近な他者(養育者)との関係性の中で社会性と認知の発達を獲得し、自己という意識ある人格を形成して行く。人生の初期段階では、身近な他者との親密な関係を通して愛着や基本的信頼の感覚を得、そこを安心基地として少しずつ外界へ

歩み出し、経験知を拡げて行く。また、身近な他者との親密な関係から共同注意が生まれ、関心の対象を共有し、そうした三項関係がやがて或る音声や字形（手話の場合は手指の形）が或る物や事を表わすというシンボル性の理解を促し、意味を帯びた記号としての言語の世界を拡げて行く。そのことによって、いま目の前にない物や事の世界へも理解を拡げていけるようになって行く。

何等かの脳に起因する要因で他者との関係が結べない ASD の子どもは、愛着や信頼関係の形成が困難となり、まず「安心基地の形成」という社会性の入口のところで躓く。次に、他者との共有対象がもてないので三項関係が成立せずシンボル性の理解も進まないため「意味世界の形成」というところでも大きな困難をかかえる。安心基地もなく意味世界もなければ、本人にとって外界は常に理解不能の混沌世界であり、恐怖や不安の対象でしかない。ちょっとした変化にも緊張を強いられ、度を越えた変化や不測の動きには、耐性となる意味や経験知の世界が育たないため、反射的な情動反応や防衛反応で応じるしかなく、時にパニックを起こすことになる。彼らの落ち着く世界は、常に静止し変化のない世界である。しかし、この生活世界では、何かを食べ、常に行動することが求められるため、彼らはその都度緊張や恐怖に晒され、神経が過敏になって行く。とりわけ音の世界は、音の焦点化ができないため言葉も音楽も全てが雑音となり、不快な音や煩い音には耳を塞ぐことしかできなくなる。

5 人の事例はそれぞれ 1～5 年の時間を掛けて信頼関係がつくれ、それが安心基地となって周囲の人たちとの関係も生まれ、徐々に共有世界を上げ、指差しや言葉が意味ある記号として機能してきたケースである。それによって二次障害としての激しい「行動障害」はほぼ消失し、ASD の診断基準にある基本症状（社会的コミュニケーションや反復的行動等）にも一定の変化が現れたのである。

5. 考察 — 「意味世界」の形成という発達課題と ASD 症状・特性との関連について

ここでは「意味世界」の形成という視点から見た ASD 者の症状について、いくつか考えてみたい。

(1) **多動について**：多動は発達障害児に多い特性の一つだが、4 事例目の D さんは 18 歳の時点でも多動傾向が続いていた。しかし、約 2 年間の取り組みで二者の共有対象が拡がり、意味ある指差しができるようになると、その多動傾向は減り、要求が実現されると笑顔も生まれていた。D さんの多動は歩行が可能となった 2 歳頃からすでに始まっており、その頃は意味世界の形成が進んでいないので、つまりは無目的行動が始まったと考えられる。逆を考えると、定型発達児が多動でないのは、その頃までに意味世界を形成していて、親に名前を呼ばればそちらに向かって歩いて行く目的行動ができるようになっているからだと考えられる。多動と意味世界の形成は表裏の関係にあると言っても良い。

(2) **共鳴反応について**：乳幼児期にある共鳴反応は、通常言葉の獲得や意味世界の形成とともに自然と消えて行く反応であるが、重度の ASD 児は意味世界の形成が進まないため、20 歳を過ぎてもそれが残る場合がある。私たちの 5 事例のうち 3 事例にも現れていたが、二者の親密な関係が着実に進み意味ある指差しや言葉のやりとりが増えていくと、いずれも幼児が泣いたり他の誰かが興奮したりする場面に出遭っても、本人が連鎖反応して動揺することは見られなくなっている。

(3) **意味付けられた感覚**：意味世界の形成が進むと、前項の変化と併せて聴覚過敏が減り、味覚の変化も生まれている。これを説明できる理論にヴィゴツキーの知覚論がある。彼は、人の感覚は発達とともに徐々に「意味付けられた感覚(知覚)」へ変化して行く、と述べている。私たちの事例でも、こうした変化が起こっていたと考えられる。勿論、それによって感覚過敏が完全に無くなる訳ではなく、不快な音を聴いても動揺することが減り、パニックにはならなくなったということである。一つの物しか食べない極端な偏食もなくなり、水や洗剤への強いこだわりもほぼ消えている。

その他、**言語が消失する折れ線型発達の現象**もこの意味世界の形成と深い関係があると考えられる。

<結論として>以上の考察からしても、二者関係の修復から入る実践の意義と根拠が確認できるかと思う。私たちが重視したのは、現在の症状や行動特性だけに注目するアプローチではなく、個々の発達の可能性とその時間軸を考慮したアプローチである。このモデルは、ヘレン・ケラーとアン・サリバンの実践にあると言ってもよい。時間は掛かるが、一度変わると急激に変化が進み、本人の主体としての発達が生まれて行く。勿論このアプローチも万能ではなく、全ての事例で有効だった訳ではない。まだ分からない点も多い。私たちは、まずは個々のケースに応じた両者のアプローチの併用が必要であり、そのアレンジや工夫によるより柔軟で多様な実践こそが大切だと考えているのである。

<参考文献>ワロン/浜田寿美男訳編 (1983)『身体・自我・社会』ミネルヴァ書房、ヴィゴツキー/広瀬信雄訳 (2002)『子どもの心はつくられる』新読書社、岡本夏木・山本雅子編 (2000)『意味の形成と発達』ミネルヴァ書房